

項目	2007年8月21日合意の行動計画の履行状況についての報告(概要)(GOV/2007/58)
P-1 及び P-2 遠心 分離	<p>イランの説明</p> <ul style="list-style-type: none"> 1980年代半ば、核開発プログラムの再活性化に着手。プシェール原発の完成と新たな研究炉の建設に力が注がれたが、失敗に終わる。また、外国から核燃料サイクル施設及び技術を取得することに失敗。⇒1980年代半ばに闇市場を活用してウラン濃縮技術の取得を決断。 <p>IAEAの結論</p> <ul style="list-style-type: none"> 実態を結論付けるには至っていない。
P-1型：1987年の申し出	<ul style="list-style-type: none"> 2007年10月9日、イランは、1987年の遠心分離機に関する図面、説明書、遠心分離機2000台分の一部の構成部品を含むサンプル(未組立)等のイランに対する提供の申し出を示す手書きの文書のコピーをIAEAに提出。 <p>イランの説明</p> <ul style="list-style-type: none"> 1987年の遠心分離技術取得については、イラン原子力庁(AEOI)長官とイラン首相によって決断され、それ以外の機関(軍部を含む)は関与していない。 <p>IAEAの結論</p> <ul style="list-style-type: none"> イランの説明はIAEAの分析と一致と結論。
P-1型：P-1型遠心分離技術研究開発(R&D)第1段階(1987-1993)	<p>イランの説明</p> <ul style="list-style-type: none"> 第1段階では非常に限られた人材(3名の研究員)の関与 遠心分離の仕組みを理解し、構成部品を国内生産することが目標 AEOIの研究部門のみが関与。大学及び物理学研究センター(The Physics Research Centre: PHRC)は関与せず。 技術的な問題解決のためにネットワークに連絡することはなかった。 <p>IAEAの結論</p> <ul style="list-style-type: none"> イランの説明は、IAEAによる分析結果と矛盾しない。 高濃縮ウランが検出されたテヘラン技術大学の役割の解明はさらなる調査を要する。
P-1型：1993年の申し出とそれに続く研究開発	<p>イランの説明</p> <ul style="list-style-type: none"> 1993年、ウラン濃縮技術の売却を目的に、供給ネットワークがイランの会社に接触⇒イランの Budget and Planning Organization のトップ兼原子力委員会メンバーに報告⇒AEOIに引継ぎ。 1993-1999年、イランはP-1型遠心分離機の構成部品の製造などに技術的な困難があった。 1997年までには人材は限られていたが、1998年頃新たな理論試験的研究が Amir Khabir 大学で始まった。 1990年代終わりには、P-1の試験運転に成功したため、ウラン濃縮工場を伴うより大規模な研究開発着手が承認された。 1990年代終わりには、調達活動が活発になり、この時期に真空装置(vacuum equipment)、マレージング鋼や高強度アルミニウムなどの原料を外国から調達した。 イランは遠心分離機の構成部品の国内生産に関与し、その殆どが軍事産業機関に所属する作業場(workshop)の名前、所在地、活動の情報をIAEAに提供した。 <p>IAEAの結論</p> <ul style="list-style-type: none"> イランではなく供給ネットワークが1993年の申し出を持ち出したということは確認できていない。

	<ul style="list-style-type: none"> ▪ IAEA によるリビア高官及びネットワーク関係者に対する聞き取り調査を基に、IAEA は 1993 年の申し出の殆どが当初リビアによって注文されていた物で、実際には 1994-1996 年にイランに配達されたと結論付ける。 ▪ 調達に関して、その時期や量のついでイランの説明は IAEA の所見と一致する。
P-2 型遠心分離技術の取得	<p>イランの説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 1996 年ドバイにて、ネットワークから P-2 型遠心分離機の全構成部品の製図の提供を受けた。⇒IAEA はこの発言の裏付けを得た。 ▪ 1996 年に製図の提供を受けた後、2002 年に至るまで P-2 型遠心分離機の研究開発はされなかった。AEOI 関係者によると、イランはこれらの製図を理解する技術的・科学的能力を持ち合わせていなかった。 ▪ 2002 年、AEOI は民間会社と修正版の P-2 型遠心分離機の製造契約を締結。2003 年 3 月に契約終結。⇒2007 年 11 月 5 日、IAEA は契約書のコピーを受け取った。以前の聞き取り調査と一致。 ▪ 当会社のオーナーは、軸受、oils、magnets を除く全ての必要な原料は、国内で入手可能であったと証言。そのオーナーは、P-2 型遠心分離機用にあつらえられたマグネットを 150 調達し、さらに何万と調達しようとしたが、供給者からキャンセルされたと説明。AEOI は、AEOI がその会社との契約を終結してからもそのオーナーは AEOI のために追加的にマグネットを調達しようとしたが失敗したと説明。⇒この説明は IAEA の認識と一致。 ▪ イランは P-2 型遠心分離機の構成部品のローターが Defence Industries Organization (DIO) 敷地に所在する作業場で製造されたことを認めた。 <p>IAEA の結論</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ イランの説明は IAEA の所見と一致する。 ▪ 環境採取からは、これらの実験活動に核物質は使用された徴候は発見されず。
検出された低・高濃縮ウランの出所	<ul style="list-style-type: none"> ▪ 2007 年 9 月 15 日、IAEA はテヘラン技術大学で検出されたウラン物質とその出所・経緯についての質問書を提示。 ▪ イランは数週間の内に解答することが求められている。
金属ウランについての文書	<ul style="list-style-type: none"> ▪ 2007 年 11 月 8 日、イランは金属ウランに関する 15 ページの文書のコピーを IAEA に提供。 ▪ IAEA はこの文書の発信元と想定されているパキスタンに照会し、さらなる情報を求めている。 <p>イランの説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ イランは、1987 年に P-1 型遠心分離機に関連する文書を取得したときに受け取ったと説明。 ▪ 1987 年の提供の申し出に記されていた鑄造装置の再転換ユニットはこのネットワークからは調達していないと説明。⇒テヘラン核研究センターでの UF4 から金属ウランへの転換を除いて、IAEA は UF6 再転換及び鑄造活動を示す徴候を発見していない。
ポロニウム 210 分離	<ul style="list-style-type: none"> ▪ 2007 年 9 月 15 日、IAEA は質問書を提出。 ▪ イランは数週間の内に解答することが求められている。
Ghachine Mine	<ul style="list-style-type: none"> ▪ 2007 年 9 月 15 日、IAEA は質問書を提出。 ▪ イランは数週間の内に解答することが求められている。
Green Salt Project 他、嫌疑のかかる研究	<ul style="list-style-type: none"> ▪ IAEA は Green Salt Project 他、嫌疑のかかる研究についてイランの対応を求めている。 ▪ イランは数週間の内に解答することが求められている。
FEP の保障措置	<ul style="list-style-type: none"> ▪ FEP の施設付属書が 2007 年 9 月 30 日から発効。